新訂 都市問題事典

Encyclopedia of Urban and Social Problems

磯村英一編修

鹿島出版会

新訂・都市問題事典

昭和55年12月5日　発行 ©

編修者　磯村英一

発行者　河相全次郎

発行所　東京都港区赤坂六丁目5番13号　鹿島出版会

Tel (582) 2251　振替 東京6-180883

方法の如何を問わず，全部もしくは一部の複写・転載を禁ず。

落丁・乱丁はお取替えいたします。　凸版印刷・和田製本

3530-320089-0927　Printed in Japan

新訂版へのことば

都市は遠くからみると，建物の集積である。しかし，近寄ってみると，多数の人間がいる。この人間は，夜はそれぞれの住宅という「ねぐら」におさまるが，昼になると動き回る。動きのなかで人間は，それぞれの「個性」を発揮する。1963年以来10年間毎年ギリシアの首都アテネで，都市問題の討議のために集まった「デロス集会」での友人故アーノルド・トインビー教授が「都市とは個性のある人間の集積」といった言葉が忘れられない。

いいかえれば，人間それぞれが成長するように，その集積である都市自身も変化してゆく。人間が毎日の食事や仕事によって生活を続けると同じように，都市も定住と移動のなかで，「新しい環境」をつくって成長する。したがって，都市に関しての，いろいろな資料も，時系列的に整理されねばならない。この事典の「増補」をしたときに，都市統計は全部新しいものにした。そして十数項目についての解釈も加えた。しかしそのなかで，人口統計等は毎年追加する必要がある。これは他の年鑑にゆずることを考え，代って，「海外主要都市事情」を加えることにした。一つの都市を2,3枚の原稿用紙で紹介することは難しい。しかしそれを可能にして，はじめて「事典」としての評価が決まると考え，戦後35年間の期間に直接たずねた数十カ所の都市のなかから「個性のある都市」50を選んで記述した。その他の加えた項目は，80年代に重要なものと考えたものである。

15年前，主な執筆者として20人の先輩友人研究者の協力を得たが，すでに3名は亡くなった。しかしその解説の内容は，今日でも貴重な資料である。新訂版のそれぞれの章に光彩を添えている。その意味も含めてこの事典は，これからの都市問題研究に指導的な役割を果たすことを改めて確信する。

1980.9.

磯　村　英　一

改訂増補版への序

この事典がはじめて刊行されたのが1965年11月，3年余たった1969年2月に増補して30頁を増し，さらに3年たった1972年に統計資料を全部新しくして，50頁を増すのだから，合せて80頁，6年間に当初の10％のページ増加となったわけである。なぜこのような計算をするかというと，都市問題の進展が，この程度の改訂増補をば，ミニマムとして必要とするほど，めまぐるしい変化を遂げつつあることを読者に知って欲しいからである。内容的にいうと，わずか6年の間であるが，3つに区切ることができる。65年の時は，都市の価値の新しい発見から「開発」に焦点がおかれた。新産業都市の建設や都市を工業整備特別地区に指定し開発することが，その具体的な現われだった。そしてわずか3年で第一回の増補をしたころには，増補にあげた項目にもみられるように，都市の未来への指向であり，具体的には，ニュータウンなどの建設がそれを示していた。しかし，その3年後の今日，統計を新しく整備しながら考えられるのは，都市の環境が，人間の生活をどのように反映するかであり，具体的には公害対策や環境制御が大きな問題となりつつある。いかに都市問題が大きくゆれているかが，このような指摘をみてもわかるのである。それだけに「事典」としての本書の価値は，今後もこのような改訂増補をつづけることが必要だということである。しかし，わたくしはそのたびに800頁を超える事典に目を通しながら，その内容は，日本の都市問題研究に，基礎的な資料としては，他に類例をみないものとして推奨できると確信を深めている。それだけに，原稿を寄せられた多数の方々に，あらためて謝意を表したい。とくに今回の改訂は，東京都関係の執筆者を煩わしたことを記して，その労を多としたい。

1972. 1. 15.

磯　村　英　一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

増補版への序

都市問題事典が刊行されてから3年あまり，その間における都市問題の進展はめまぐるしいものがある。21世紀の都市像と考えられていたメガロポリスもすでに現実の課題として，わが国の新全国総合開発計画の中で取り上げられている。しかし一方では，アメリカ・メガロポリスの中核である首都ワシントンに全米の貧者たちが集まって，華麗な都心に「復活の都市」をつくる事件が起こった。花の都パリ周辺の都市の再開発は，着々進みつつあるが，伝統の都心カルチエ・ラタン地区は，激動する学生たちによって革命の広場にさえなろうとした。わが国も例外ではない。新しい都市のモデルとして計画された「研究学園都市」は，大学紛争の中で，これからどのように進むかが，あらためて問われようとしている。

最近の都市建築は，破壊を前提にした建設であるとさえ聞いている。そうなると，現在のような大学紛争も，新しい建設への進展の一つではないかという反問さえでてくる。

人間にとっていったい都市とは何か。都市の論理はどのように問わるべきか。都市問題は，まさに都市の形体的・空間的・構造的な面から，人間そのもののあり方との関連において掘り下げられねばならない。

このような経過の中で，新しい都市問題の展開に資するように，とりあえず集めたのがこの 50 項目。自らその解説に当たりながら，僅か3年の間における都市問題の推移の激しさに驚きを感じる。おそらくこのような補正の努力は今後もつづけられるであろう。否，編者の当然の責任として，読者とともにこの「事典」をば，成長する都市のメルクマールとして発展させてゆきたい。

1969. 2. 20.

磯　村　英　一

はじめに

1965 年 8 月 15 日，それは日本が不幸な戦争を終えて，ちょうど満20年目であった。私はロンドンの空港から，スコットランド地方のニュータウンの建設状況を視察すべく，案内のスコットランド開発公団副理事長のニコル氏と機上のひととなった。真夏のイングランド地方の田園風景は実に美しい。この国の都市計画の理想が，依然として田園都市論にあることも，なるほどとうなずかれる。しかし機上の私は，20年前の敗戦の日の思い出と，はからずも 2 年前のこの日に，この「都市問題事典」をつくる決意をしたことの追憶で頭がいっぱいだった。

この旅行は，イギリスが国際都市研究センターをその国内に設置するために主要国の研究者を招待して協力を要請した集会に出席のためだった。その招請が急であったので，ほとんど校了に近いこの事典の始末もそこそこに，旅立ってしまった。それだけに，この集会の中心であったケンブリッジ大学での会合を終え，イギリス国内の視察に出かけても，思いは常に事典の校正のことにあった。そして機上から，イギリスのニュータウンなどを見ながら，事典の中に書かれた未来の都市の記述などを思い浮かべながら，この文章を書きはじめたのである。

私が微力をかえりみず，このような事典をつくる決意をしたのは，次のような理由がある。

1) 都市問題は日々に新たなる現実の問題である。そのためには学問と経験の二つの背景をもって解決の方法を発見するのが適当である。

私はおこがましいが，都市行政について20余年にわたる体験をもっている。

よかれ悪しかれ東京市から東京都を通じての23年間の経験は，極めて貴重なものがある。その後，大学という象牙の塔に入って15年，学界の表裏にも通じるようになって，ますます都市問題は現実と理論との調和の上に解決を見出すべきだとの確信をもつに至った。

2) 都市問題は日本列島の繁栄につながるものである。日本のような狭い国では，もはや都市や農村の区別はなく，都市の計画そのものが日本の地域計画につながるものがある。その点で都市問題の対象は，これまでの伝統を離れた新しい日本のあり方とつながるのである。

私は大学での自らの研究のかたわら，幾多の実地調査を通じて，都市問題は現実の〈市〉という行政区画の範域を越えての課題であり，したがって町村，特に農村との計画と分れて存在するものではないことを知った。戦後の日本都市学会の再建のメンバーとして参画しながら，さらに広範囲の人々と日本地域開発センターの設立に努力したのも，都市の範域的変化が都市問題の本質に影響している現実を認識したからである。

政府によって新産業都市の建設が促進され，工業整備の特別地区が指定され，首都圏に続いて近畿圏整備本部が設けられるようになったのも，基礎的には首都東京を中心とする都市問題と密接なつながりがある。

3) 都市問題は，同時に社会問題でもある。それは現代都市の機能や構造の急激な変化がそこの住民の生活にプラスとマイナスの影響を与えているからである。都市問題は過渡的にも本質的にも多くの社会問題を含んでいる。

私は事典の英訳を，あえて "Encyclopedia of Urban and Social Problems" とした。都市問題事典の直訳ならば間違っている。しかし多数の執筆者には私が社会科学者であるという立場を認識していただき，全体の項目の選択や配列等につき社会問題的視点を加えているからである。それは都市問題の解決が，現代社会問題であると同時に当面の病理現象を解決するのに大きな役割を演じることができると思うからである。したがってこの事典は，単に多数の執筆者

を集めた論文集ではなく，都市問題の解決を社会問題的に扱う配慮がなされている。

4) 都市問題は世界共通の現象であり，国際的課題である。それは最近における学界等の国際交流の動きをみてもわかる。

現に私が8月9日から12日まで出席していた集会でも，絶えずお互いの国が，都市問題について，どのような方針をとっているかが論議の焦点となった。そればかりではない。1963年から3年つづいて，ギリシアのアテネを中心に，Delos Symposion が開かれている。各国の都市研究者たちの自主的参加による会合であり，新アテネ憲章（本文参照）の策定を目標にしている。さらに上述のイギリスでの集会が契機になって，ニューヨーク，ロンドン，ハーグ，アテネ，東京と，世界をつなぐ——やがては東欧圏内の都市も含めて——研究の連絡体制がとられようとしている。国連の社会局内に都市研究部が設置されようというのも新しい動きである。

5) 都市問題の研究は，これまで建築や土木・衛生など都市工学という自然科学的分野と，行政・財政・経済・社会といったような社会科学的分野等がおのおのバラバラになっており，結局は都市行政を運営して行くのに都合のいいように専門的な知識を提供するに過ぎなかった。しかし今や都市の存在が，一つの科学の対象になりうる可能性が各方面で指摘されるようになってきた。

私が1963年以来，引き続いて出席している前述の Delos Symposion はアテネ憲章の改訂を目標としているが，主唱者のドクシアデス Constantinos A. Doxiadis は "Ekistics" ——Science of human settlement の名のもとに，都市科学を設定しようとしている。また1965年7月11日，日本都市学会は全国理事会で，規約の改正草案を定め，学会の新しい仕事として，「都市学成立のための調査研究」を加えることになった。

以上に述べた幾つかの条件は，客観的には都市の研究が総合的になさるべき時期であることを裏書きしており，そのためには何らかの形で，既存の研究，

理論等につき，各分野の調査資料等をできるだけ整備することが必要となってきた。そのような仕事は，決して個人の努力だけではできないものであり，学会等が実施することが最も望ましい。

その点で，かつてこの計画を日本都市学会内で進めてみたが，学会のメンバーが広範囲にわたっており，会員の意見を十分に反映して実行することは極めて困難なことが分かった。しかし，都市問題解決のための科学的基礎資料の整備は，緊急を要する時期にきている。

ここに，私の考える立場は別としても，このような事典が必要であり，まず自らの責任において，その第一歩を踏み出す必要を感じたのである。

幸い，私の最近における都市研究の変らざる同志である若き諸君がまず私の意図，草案についての検討に協力を誓ってくれ，さらに内外における都市問題の先輩各位が，専門の分野について項目の作成に助言を与えられ，さらに，各論のトップに貴重な論文を寄せられた。全く望外の光栄であり，私の一生を通じて，これほど感激を覚えたことはない。ここに若き同僚諸君への感謝と共に，謹んで謝意を表する次第である。ただその間に，私の都市研究の変らざる指導者であった元慶応義塾大学塾長の奥井復太郎先生が急逝されたことは，何としても遺憾に堪えない。謹んでこの一本を先生の遺影に供え，ご冥福を祈りたい。

この事典が，この種の本としては世界最初のものとして日の目をみるようになったのは，まったく鹿島研究所出版会の方々の厚意によるものであり，特に長谷川覚，鈴木純恭，矢島直彦，加藤英男の諸氏には，お礼の言葉がないほどお世話になった。心からお礼を申し述べておく。

スコットランドへの飛行中に書きはじめたこの序文は，その後の旅程の忙しさに，今そのまとめを再び空の旅の中で書いている。1965 年 8 月 22 日，パリを飛び立った JAL は，今まさに北極圏の上空をまっすぐにアンカレッジに向っている。その時，ふと昨年の Delos Symposion に出席したソ連の学者が，

シベリアに幾つかの新しい近代都市が建設されつつあると述べて注目をひいたことを思い出した。

飛行機は快晴の真夏の北極の空を気持よく飛んでいく。ロンドン，パリから実時間14時間で，夜のない空の旅は都市問題の待つ東京へと続いて行く。

1965. 8. 22.

三度北極圏を越えた記念の日に

磯　村　英　一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

編　修　者

磯村英一

執　筆　者

（項目順）

木内信蔵　小田橋貞寿
藤岡謙二郎　宮原誠一
八十島義之助　米林富男
今野源八郎　横山光雄
竹中竜雄　吉富重夫
千葉雄次郎　幸島礼吉
谷重雄　丹下健三
日笠端　高山英華
木田徹郎　奥井復太郎
大道安次郎　舘稔

（五十音順　＊編集準備委員）

青井和夫　浅尾倫行　荒川祐吉　井門富二夫
池田忠義　池野武　石黒哲郎　石原舜介
石水照雄　磯部浩一　＊磯村光男　一番ケ瀬康子
伊藤達雄　井上孝　岩井弘融　入沢恒
T.ウィルキンソン　上田正夫　上田康二　植松喜稔
植村福七　鵜飼勇　牛込久治　大塩俊介
大野木克彦　＊大橋薫　大森一二　岡田忠男
岡田喜秋　岡村重夫　岡本秀昭　岡本良一
小川利夫　荻田保　沖田哲也　＊奥田道大
小倉襄二　小古間隆蔵　尾崎登　何初彦

角本良平　片桐達夫　加藤秀俊　加藤由利子
川上秀光　川添登　河辺宏　神田豊
亀卦川浩　木田進　北川隆吉　楠瀬正太郎
久世公堯　国井富士利　熊谷幸博　倉沢進
倉辻平治　黒田俊夫　*黒沼稔　孝橋正一
小島英俊　児島美都子　小林輝一郎　*小松原圭子
小松原久夫　*斎藤昌男　三枝慶八郎　佐藤竺
佐藤英一郎　佐藤淳一郎　佐藤智雄　里見宜男
重田信一　柴田徳衛　嶋田久吉　清水馨八郎
清水寛　下総薫　城谷豊　杉政孝
*杉山熙　鈴木武夫　鈴木忠義　鈴木成文
副田義也　園田恭一　高村久夫　竹内郁郎
竹林寛　竹下惟利　*竹中和郎　竹之下休蔵
田中敏之　田辺健一　田村健二　田村浩一
塚本哲　辻村明　中久郎　中川幽芳
長門保明　中野尊正　中野ツヤ　西村保孝
貫洞哲夫　野木義美　橋本重三郎　橋本正巳
浜英彦　早川和男　林武一　原口一次
原田伴彦　春原昭彦　日俣周二　広田哲夫
*広部忠彦　福井英一郎　福武直　古川哲次郎
*星野郁美　細野孝一　細野日出男　本田弘
牧賢一　松平斉光　三井為友　宮出秀雄
宮本義孝　村田宏雄　矢崎武夫　山鹿誠次
山口岳志　山下章　山田正男　横山勝信
横山和彦　横山定雄　若林竜夫　渡辺定夫

凡　例

1) 仮名づかいは新仮名づかいによる。漢字は当用漢字に制限しない。

2) 外国語を仮名書きにした場合の表記は，なるべく原音を尊重するようにしたが，慣用に従った場合もある。

　できるだけ原語を記入したが，重複は避けた。

3) 強調すべき語には〈　〉，引用語には「　」，書名には『　』を用いた。ただし外国の書名はイタリックを用い，特に“　”を付さない。

4) 大項目は執筆者名をタイトルと共に掲げたが，中項目・小項目は各項本文の末尾に記した。

5) 欄外偶数頁の見出しは該当の大項目を示し，括弧内は中項目を示す。奇数頁の見出しは小項目を示すが，小項目がない場合は該当ページに記述されている大・中項目を示してある。

6) 各項目の末尾に参考文献を記したが，その記載順序は，編著者名・書名・発行年・発行所名とした。幾つかのものを連記するときは，その間を；で区切ってある。

7) 本事典中の関連・参照項目については「見よ項目」→を設けて示し，索出の便宜をはかった。たとえば（→Ⅰ-3-(7)）は大項項Ⅰ・中項目3の小項目(7)参照，ということである。ⅠⅡⅢ……は大項目，1，2，3……は中項目，（　）内の数字は小項目を示している。

8) 索引は事項および人名別にし，ともに五十音順に配列した。

　数字は当該の事項・人名所在の頁数を示し，㊐は図版，㊥は表を示す。

目　次

I. 都市の形成　1—4

1. 都市の歴史　4

2. 都市の自然　7

(1) 都市と空間……8
(2) 都市と土地（地形）……11
(3) 都市と水……12
(4) 都市と気候……13

3. 都市の発達　14

(1) 都市の意義……16
(2) 市……17
(3) 都市化……18
(4) 日本の都市化……19
(5) 過密都市……20
(6) メトロポリス……21
(7) メガロポリス……23
(8) エキュメノポリス……25

4. 都市と人間　26

(1) 都市と文明……27
(2) マスと群衆……28
(3) 都市と人間疎外……29

5. 都市と人口　30

(1) 人口の構成……32
(2) 人口の変動……34
(3) 人口の流動……38
(4) 人口推計……40

6. 都市の住民　43

(1) 市民と公民……44
(2) 市民性……45
(3) 市民意識……46
(4) 市民組織……47
(5) 市民社会……48

7. 都市の地域　49

(1) 都市の範域……51
(2) 標準都市地域……52
(3) 都心と副都心……53
(4) 都市郊外……55
(5) コミュニティ……56
(6) 都市圏……57
(7) 人口集中地区……58

8. 都市と集団　59

(1) 都市集団の類型……60
(2) 家族集団……61
(3) 近隣集団……62
(4) 随意集団……63
(5) 職業集団……64

9. 都市と階層　66

10. 都市と農村　68

11. 農村の都市化　69

12. 都市の開発　71

(1) 都市の開発と保存……73
(2) 都市の人間開発……74
(3) 社会開発……74
(4) 地域開発……75

II. 都市の類型 77—80

1. 歴史的分類 80
(1) 宿場町……81
(2) 城下町……82
(3) 門前町……84
(4) 市場町……84
(5) 港　町……85
2. 構造的分類 85
(1) 帯状都市……87
(2) 多核都市……87
(3) 核心都市……88
3. 機能的分類 89
(1) 総合都市……91
(2) 政治都市……91
(3) 文化都市……92
(4) 学園都市……92
(5) 観光都市……92
(6) ベッドタウン……93
(7) 漁業都市……93
(8) 衛星都市……93
(9) 産業都市……94
(10) 保養都市……94
(11) 軍事都市……95
(12) 港湾都市……95
4. 法制的分類 95
(1) 特別市……97
(2) 指定都市……97
(3) 新産業都市……98
5. 施策的分類 98
(1) 拠点都市…… 100
(2) 基幹都市…… 100
(3) 広域都市…… 101
(4) 都市連合…… 101
6. 階層的・地位的分類 102
(1) 首　都…… 103
(2) 大都市…… 105
(3) 中都市…… 105
(4) 地方都市…… 106
(5) 百万都市…… 107

III. 都市の交通 109—112

1. 都市交通圏 112
2. 交通機関 114
(1) 鉄　道…… 115
(2) 軌　道…… 117
(3) 自動車…… 118
(4) トロリーバス…… 118
(5) モノレール…… 119
(6) 航空機…… 121
(7) 船　舶…… 122
3. 都市交通の機能 123
(1) 乗車回数…… 125
(2) 乗車効率…… 126

(3) ラッシュアワー…… 127
(4) 時差出勤…… 128
(5) 交通混雑
(交通渋滞，交通麻痺) …… 129
(6) 交通災害 (交通事故) …… 131

4. 交通施設 133

(1) 駐車場…… 135
(2) ターミナル…… 137
(3) モーテル…… 139
(4) ガソリンスタンド…… 140
(5) 道路標識…… 141

5. 交通経営 144

(1) 経営形体…… 145
(2) 都市交通運賃…… 146

6. 都市交通の統制・調整 147
7. 都市と道路 149
8. 都市と橋梁 152
9. 都市と港湾 154
10. 都市と空港 156

Ⅳ. 都市の公営事業 159—162

1. 公益事業 162

(1) 水道事業…… 163
(2) 下水道事業…… 164
(3) 交通事業…… 166
(4) ガス事業…… 167
(5) 電気事業…… 168

2. 公益施設 169

(1) 病　院…… 170
(2) 市場 (中央卸売市場) …… 171
(3) 火葬場…… 172
(4) 屠　場…… 173
(5) 公益質屋…… 174
(6) 墓地・霊園…… 175

3. 収益事業 176

(1) 競　馬…… 178
(2) 競　輪…… 178
(3) オートレース…… 179
(4) 競　艇…… 179
(5) 宝くじ…… 180

Ⅴ. 都市のコミュニケーション 181—184

1. マス・コミュニケーション 184

(1) 新　聞…… 186
(2) 雑誌・書籍…… 187
(3) 週刊雑誌…… 189
(4) テレビ…… 190
(5) ラジオ…… 192
(6) 映　画…… 193

2. 宣伝と広告 194
3. 集会とデモ 196
4. 世　論 197
5. 電信と電話 199

(1) 都市と電信…… 201
(2) 都市と電話…… 202
(3) 公衆電話…… 203

6. 郵　便 204

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com